

生活科・総合的な学習の時間の取組の充実を図るための 附属学校教員と大学教員の協働体制の構築（その3）

藤上 真弓^{*1}・徳永 真衣^{*2}・大塚 進真^{*3}・志賀 直美^{*4}・
久保田大貴^{*5}・浦田 敏明^{*6}・佐伯 英人^{*7}

A Consideration for Collaboration system

Among two Attached Elementary Schools and the Faculty of Education (III):
To Improve the Quality of Living Environment Studies and the Period for Integrated Studies

FUJIKAMI Mayumi^{*1}, TOKUNAGA Mai^{*2}, OTSUKA Yukimasa^{*3}, SHIGA Naomi^{*4},
KUBOTA Daiki^{*5}, URATA Toshiaki^{*6}, SAIKI Hideto^{*7}

(Received JULY 31, 2024)

キーワード：協働体制、生活科、総合的な学習の時間、授業づくり

はじめに

山口大学教育学部では「学部・附属共同プロジェクト」という取組がなされており、教育学部の附属学校教員と大学教員とが連携して共同研究を実践している。筆者らは、筆者の1人の藤上をリーダーとして、2018年度、2019年度、2021年度、2022年度の4年間、学部・附属共同プロジェクトにおいて「授業づくり支援プロジェクト」を実践し、附属学校教員と大学教員が、生活科・総合的な学習の時間の授業を参観し、授業について話し合い、振り返りを行ってきた（藤上ほか、2019・2020・2022a・2022b・2023）。

2022年度の「授業づくり支援プロジェクト」では、プロジェクトに参加した久保田の意識を明らかにし、プロジェクトの有効性について議論した（藤上ほか、2023）。

その結果、以下の2つのことが明らかになった。

- ① 各活動に対して良好な意識をもったことが示された。さらに、各活動の話し合いを通して、総合的な学習の時間について理解を深めたり、考えを深めたりしたようすをうかがい知ることができた。
- ② プロジェクトを実践した結果、「授業を実践する自信の程度」が高まったことが示され、「授業を実践する自信の程度」の向上にプロジェクトの活動が有効に機能したことが明らかになった。また、「授業を実践する自信の程度」が高まった主な要因を明らかにすることもできた。

1. プロジェクトの目的、構成メンバーと役割

本稿では「授業づくり支援プロジェクト」をプロジェクトと以下に称する。プロジェクトの1つの目的は、これまで築いてきた協働体制を持続・発展させることである。また、2つめの目的として、生活科・総合的な学習の時間の本来的な存在意義と現代的意義について議論し、附属学校として提案性のある授業に取り組んでいくことである。プロジェクトの構成メンバーと役割を表1に示す。

*1 山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻教育実践開発コース *2 山口大学教育学部附属光小学校
*3 柳井市立柳井小学校（前 山口大学教育学部附属光小学校）
*4 山口県教育庁乳幼児の育ちと学び支援センター（前 山口大学教育学部附属山口小学校）
*5 山口大学教育学部附属山口小学校 *6 前 山口大学教職センター *7 山口大学教育学部小学校総合選修

表1 プロジェクトの構成メンバーと役割

氏名	所属	役割
○ 徳永 真衣	山口大学教育学部附属光小学校	生活科の実践研究
○ 志賀 直美	山口大学教育学部附属山口小学校	生活科の実践研究
○ 大塚 進真	山口大学教育学部附属光小学校	総合的な学習の時間の実践研究
○ 久保田大貴	山口大学教育学部附属山口小学校	総合的な学習の時間の実践研究
□ 藤上 真弓	山口大学大学院教育学研究科 教職実践高度化専攻	総括、企画・運営、連絡調整、 授業改善指導、講師招聘
□ 浦田 敏明	山口大学教職センター	授業改善指導
□ 佐伯 英人	山口大学教育学部小学校総合選修	授業改善指導、調査・分析、効果検証

○：附属学校教員、□：大学教員

2. プロジェクトの概要と研究の目的

プロジェクトでは1回目の活動～6回目の活動（活動①～活動⑥）を2023年8月30日～2024年1月21日に行った。プロジェクトの活動内容を表2に示す。なお、活動⑤と活動⑥は同日（2024年1月21日）に行った。活動⑤の時間は13:10～14:10と14:20～15:20、活動⑥の時間は15:30～16:00であった。また、活動⑤と活動⑥では外部講師として、元文部科学省初等中等教育局主任視学官の嶋野道弘氏を招へいた。

筆者の1人である徳永はプロジェクトの構成メンバーであり、附属光小学校において生活科の実践研究を行っている（表1）。徳永は、表2に示した6回のプロジェクトの活動中6回の活動（活動①、活動②、活動③、活動④、活動⑤、活動⑥）に参加した。また、その中の2回の活動（活動③、活動④）において授業を実践し、公開した。活動②の話合いのようすを図1に示す。活動③の話合いのようすを図2に示す。また、活動③において、話合いの題材にした授業のようすを図3に示す。

本研究の目的は、プロジェクトに参加した徳永の意識を明らかにし、プロジェクトの有効性について議論することである。

表2 プロジェクトの活動内容

活動名	月日	活動	参加者	実施場所と形態
活動①	8月30日	生活科の内容(2)「家庭と生活」で実践予定の単元構成と授業展開を提案し、協議を行った。話し合った内容は、主に「単元で設定した手立て」と「発達段階」についてであった。	藤上、佐伯、徳永	オンライン
活動②	11月1日	生活科の内容(5)「季節の変化と生活」と内容(6)「自然や物を使った遊び」で実践した授業について実践報告を行い、協議を行った。話し合った内容は、主に「秋について話し合う活動」、「見つけた秋のお気に入り伝える活動」、「秋のおもちゃ作りの計画を立て、おもちゃを作る活動」についてであった。	藤上、佐伯、徳永	山口大学教育学部附属光小学校・対面
活動③	11月6日	生活科の内容(2)「家庭と生活」で授業を公開し、授業終了後に協議を行った。話し合った内容は、主に「公開授業の目標」、「今後の授業の展開」、「子どもたちへの対応の仕方」についてであった。	藤上、浦田、徳永	山口大学教育学部附属光小学校・対面
活動④	11月24日	生活科の内容(2)「家庭と生活」で授業を公開し、授業終了後に協議を行った。話	藤上、徳永、大塚	山口大学教育学部附属光小学校・

		し合った内容は、主に「低学年のキャリア発達」と「話し合いのさせ方」についてであった。		対面
活動⑤	1月21日	大塚と久保田が「総合的な学習の時間」で実践した授業について実践報告を行い、協議を行った。話し合った内容は、主に「地域への愛着を深め、自己の成長に気付かせる手立て」と「子どもたちが自ら課題解決に向かうための手立て」についてであった。 実践報告を行ったのは大塚と久保田であり、徳永は実践報告を聞き、協議に参加した。	藤上、浦田、徳永、志賀、大塚、久保田、嶋野（外部講師）	オンライン
活動⑥	1月21日	生活科の授業づくりをする中で気になっていることを相談し、協議を行った。話し合った内容は、主に「子どもたちの気付きを表出させる手立て」と「子どもたちの多様な考えを保障する手立て」についてであった。 授業づくりについて相談したのは徳永と志賀であった。	藤上、浦田、徳永、志賀、大塚、久保田、嶋野（外部講師）	オンライン



図1 活動②の話し合いのようす



図2 活動③の話し合いのようす

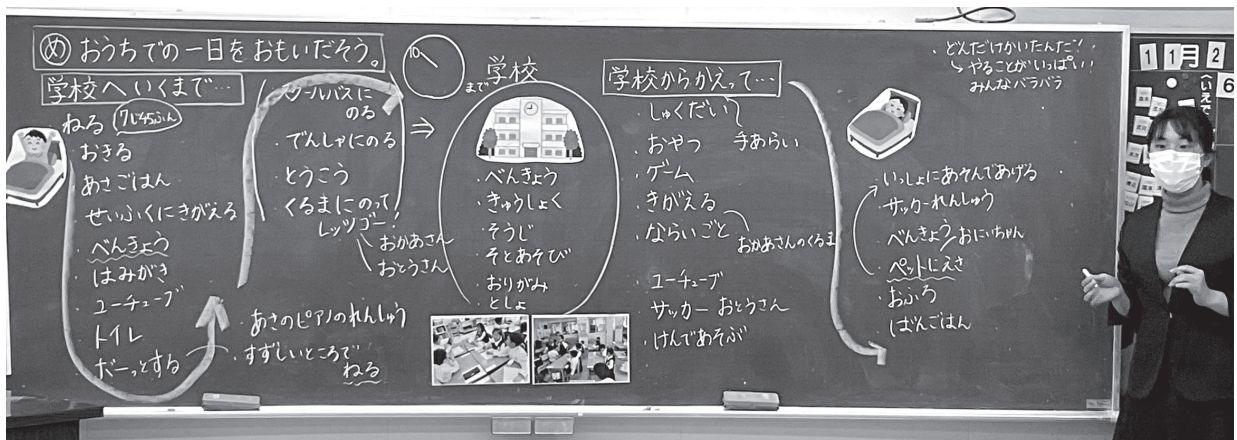


図3 公開授業（活動③において話し合いの題材にした授業）のようす

3. 調査の方法

前述したように筆者の1人の徳永の意識を明らかにする目的で2つの質問紙（質問紙A、質問紙B）を作

成した。

質問紙Aでは「問1」と「問2」を設定した。「問1」では「プロジェクトの活動後、プロジェクトの活動内容に対するあなたの気持ちを教えてください。質問項目『勉強になった』において、当てはまる番号に○を1つ付けてください。」と記して、質問項目「勉強になった」を設定し、5件法で回答を求めた。5件法は「5:とても当てはまる、4:だいたい当てはまる、3:どちらともいえない、2:あまり当てはまらない、1:まったく当てはまらない」とした。また、「問2」では「問1でそのように回答した理由を書いてください。」と記して、記述欄を示した。質問紙Aを用いた調査は、6回の活動（活動①、活動②、活動③、活動④、活動⑤、活動⑥）を終了した後にそれぞれ行った。

質問紙Bでは「問1」と「問2」を設定した。「問1」では「生活科の『授業を実践する自信の程度』を0%、10%、20%・・・100%の中から1つ選択し、その数値を（ ）に記入して示してください。」と記して、記入欄「（ ）%」を示した。また、「問2」では「問1でそのように回答した理由を書いてください。」と記して、記述欄を示した。質問紙Bを用いた調査は、プロジェクトを開始する前（活動①を行う前）とプロジェクトを終了した時（活動⑥を終了した後）に行った。

4. 分析の結果と考察

4-1 質問紙Aについて

質問紙Aの「問1」と「問2」の結果を表3に示す。なお、「問1」で選択された選択肢が「5:とても当てはまる」であれば5点、「4:だいたい当てはまる」であれば4点、「3:どちらともいえない」であれば3点、「2:あまり当てはまらない」であれば2点、「1:まったく当てはまらない」であれば1点とし、これを表3において「意識」と表記した。

表3の「意識」をみると、各活動における得点は5点であった。このことは、各活動に対して良好な意識をもったことを示している。記述の内容をみると、各活動の話し合いを通して、生活科について理解を深めたり、考えを深めたりしたようすをうかがい知ることができる。

表3 活動に対する意識（「勉強になった」）と記述の内容

活動名	意識	記述の内容
活動①	5点	○ 「単元で設定した手立て」について 「家庭をもっと笑顔にするための作戦」という単元を設定し、子どもたちが家庭で行った活動に対して、保護者から手紙を書いていただき、授業の中で子どもたちに手紙を渡し、読ませようと考えていた。この「家族（保護者）からの手紙」が効果的であるかについて、話し合った。話し合った結果、個々の家庭環境に配慮する必要があること、手紙による評価には即時性がないこと、想定している「手紙」に記述する内容を教員が設定していることなど、手立てに課題があることが明らかになった。子どもたちを評価する手立てについて検討することができ、勉強になった。子どもたちが各家庭で行った活動に対して、家族（対象）の表情を簡単なマークで描かせ、気持ちを推察させたり、そのときの自分の感情とその理由をメモさせたりしておくことで、学級で話し合うことができ、考えの変容や自分たちの頑張りに気付くことができると考えた。また、子どもたちが気付くための手がかりを蓄積することにもなると考えた。 ○ 「発達段階」について 1年生という発達段階にどのような特徴があり、また、発達段階に応じてどのような指導をすれば良いかについて話し合った。その結果、1年生は、ピアジェの提唱する認知発達段階では「前操作期」の終盤に位置付けられており、自己中心性が強く自分の立場でしかものを見られなかったり、相手の表情から感情を推し量ることが難しかったりする時期に該当する。「子どもたちが、家族の表情から、その気持ちを推察する場を設定する」という手立ては、子どもたちの発達を意図的に促す手立てとして有効であると考えた。
活動②	5点	○ 「秋について話し合う活動」について 単元の導入では「秋について話し合う活動」を行った。この活動では、ヒマワリの花が咲いている写真と枯れている2枚の写真を提示し、両者を比べさせ、違いに気付かせた。この気付きをもとに、なぜ、違いがあるのかを考えさせ、話し合わせた。この活動をもとに授業づくりについて話し合った。その結果、子どもたちの生活経験はさ

		<p>まざまであることを踏まえて、授業をつくる必要があること、また、子どもたちの家庭環境に配慮する必要があることが分かった。話合いの場を設定する際には、子どもたち全員が体験していることをもとに話し合うことが大切であると考えた。子どもたちは、その体験をもとに考え、話し合うことで、理解を広げたり、思いを共有したりすることができる考えた。また、生活科では、一人ひとりの認識を受け止め、その思いを大切にすることが改めて重要であると感じた。</p> <p>○ 「見付けた秋のお気に入り伝える活動」について</p> <p>前述の活動（「秋について話し合う活動」）を行った後、地域の自然を教材として、野外で体験活動「秋を感じるものをさがす活動」を行った。この活動では、子どもたちに、秋を感じるものをさがさせ、採集させた。その後、「見付けた秋のお気に入り伝える活動」を行った。この活動では、秋を感じるものの中から自分の「お気に入り」を選ばせて表現させた。この活動をもとに授業づくりについて話し合った。その結果、「お気に入り」とは、与えられた学習場面で1つを選択させて決めるというものではないため、子どもたちの思考の流れに沿っていない活動を設定していたことが分かった。子どもたちが、秋を感じるものについて表現したいと思うことができ、話合いを通して、秋について認識を深められるような活動にしていきたいと感じた。</p> <p>○ 「秋のおもちゃ作りの計画を立て、おもちゃを作る活動」について</p> <p>前述の活動（「秋について話し合う活動」）を行った後、「秋を感じるものを使って遊ぶ活動」を行った。この活動では、野外での体験活動（「秋を感じるものをさがす活動」）で採集した落ち葉や松かさなどを使わせて遊ばせた。このとき、子どもたちから「秋を感じるものを使って、おもちゃを作りたい」という希望があったので、「秋のおもちゃ作りの計画を立て、おもちゃを作る活動」を行った。この活動で、子どもたちは、おもちゃ作りを行ったが、子どもたちの中に、計画していないものを作ろうとする姿がみられた。この活動をもとに授業づくりについて話し合った。その結果、子どもたちの思考は変わるものなので、計画にこだわりすぎず、させてみるのが大切と考えた。その後、子どもたちが、その製作過程の記録から、自分の思いや行動を振りかえることができ、自身の成長を感じたり、考えたりできれば良いと思った。</p>
活動③	5点	<p>○ 「公開授業の目標」について</p> <p>授業の目標（ねらい）は「子どもたちが自分の家庭生活について振り返ることで、その家庭生活が多くの人に支えられていることに気付くことができるようにする。」であったが、このたびの公開授業では、授業の目標を完全に達成することができなかった。そこで、授業目標の設定の仕方について話し合った。その結果、この授業の目標としては「子どもたちが『私は、1日うち、家庭で過ごしている時間が長く、また、活動の多くを家庭で行っている』と気付くことができる。」が妥当であったということになった。</p> <p>○ 「今後の授業の展開」について</p> <p>子どもたちが自分の家庭で過ごす時間について気付くことができた後、どのように授業を展開して行けば良いかについて話し合った。その結果、次時の授業で、公開授業では到達することができなかった「子どもたちが、自分の家庭生活と家族との関係について考えられる」を授業の目標として実践すれば良いということになった。さらに、その後、授業では、子どもたちに、自分が各家庭で行った活動をもとに話し合わせ、自分の家庭での役割を明らかにさせる。さらに、自分ができる仕事や役割が増えていることに気付かせ、「自分が成長している」と認識させると良いということになった。話合いを通して、授業中、子どもたちに気付かせたいことが何であるのかを考えることができた。</p> <p>○ 「子どもたちへの対応の仕方」について</p> <p>公開授業をもとに、授業中の声かけなど「子どもたちへの対応の仕方」について話し合った。その結果、子どもたちが自分の考えを発言することができる学級風土をつくること、また、友達の意見を聞くことのできる学級風土をつくること、さらに、ほめて伸ばす学習規律をつくるのが大切であると考えた。日頃の学級経営の大切さを感じることもできた。</p>
活動④	5点	<p>○ 「低学年のキャリア発達」について</p> <p>「低学年のキャリア発達」について、ライフキャリアレインボーをもとに話し合った。その結果、内容(2)「家庭と生活」で、家庭生活では家族が支え合っていることに気付かせることは、子どもたちが、自分のキャリアを「役割」という視点から考える点において意義があり、将来の学び（キャリア教育）につながると考えた。</p>

		<p>○ 「話し合いのさせ方」について</p> <p>「話し合いのさせ方」について、公開授業でみられた子どもたちの様態をもとに話し合った。その結果、子どもたちが自分の家庭における役割について話し合う中で、子どもたちが関係付けたり、分類したりできるように教員が支援することが大切であるということが分かった。そうすることで、子どもたちが、家庭生活では家族が支え合っているということに気付くことができると考えた。</p> <p>話し合いの過程において「家族が笑顔になると自分も笑顔になった」や「もっと家族のためにできることを見付けたくなった」といった発話がみられた際に、教員が「どうして、そう思ったの？」と理由を問い、子どもたちに考えさせるなど、教員がコーディネーターとして適切に介入し、話し合いを支援することが大切であると考えた。</p>
活動⑤	5点	<p>○ 「地域への愛着を深め、自己の成長に気付かせる手立て」について</p> <p>久保田先生より、第3学年の総合的な学習の時間で、子どもたちが「徳佐りんご」について理解を深め、地域への愛着をもつことができる授業について実践報告があった。授業では、子どもたちが、複数回、地域を訪問し、直接、地域の方から話を聞く活動を実施していた。また、各授業の終了時に、子どもたちに振り返りを書かせ、単元の終了時に、子どもたちが、その振り返りを読むことで、自らの成長に気付くことができるようにしていた。この実践報告をもとに話し合った。その結果、子どもたちが理解を深め、地域への愛着をもつようになるためには、対象が子どもたちにとって身近な存在であること、また、その対象と繰り返し関わる活動を仕組むことが大切であると考えた。生活科の授業でも、子どもたちが自身の活動を振り返り、自らの成長に気付くことができるように支援していきたいと考えた。</p> <p>○ 「子どもたちが自ら課題解決に向かうための手立て」について</p> <p>大塚先生より、第6学年の総合的な学習の時間で、子どもたちが地域「光市室積」の方にお世話になっていることに気付き、理解を深め、感謝の気持ちをもつことができる授業について実践報告があった。授業では、子どもたちが、自ら学習課題をつくり、学習内容・学習方法を決めて学んでいて、課題解決に向かう過程を子どもたちにつくらせていた。各授業の終了時に、子どもたちに「自分たちの話し合い」について振り返りを書かせていた。また、地域の方をゲストティーチャーとして招聘し、助言を受ける場を設定していた。この実践報告をもとに話し合った。その結果、子どもたちが自ら課題解決に向かうためには、話し合う活動を繰り返し設定することが大切であると考えた。また、話し合ったことについて、子どもたちが振り返る場を設定することが大切であると考えた。さらに、子どもたちの課題を解決させるためには、ゲストティーチャーから助言を受ける場を適切に設定することが大切であると感じた。</p>
活動⑥	5点	<p>○ 「子どもたちの気付きを表出させる手立て」について</p> <p>生活科の授業づくりをする中で気になっていることの1つに「どうすれば、子どもたちが気付き、それを表出させることができるのか」があったため、相談をし、それについて話し合った。その結果、授業中、前時に子どもたちが書いた自身の「振り返り」を読む場をつくらせたり、「振り返り」の記述をもとに友達と話し合わせたりする場をつくることで、子どもたちが気付いたり、その気付きを広げられたりできると考えた。また、教員が子どもたちの様態を見取り、その行動や発言をもとに、子どもたちに問い返すことで、子どもたちの気付きを深められることが分かった。</p> <p>○ 「子どもたちの多様な考えを保障する手立て」について</p> <p>生活科の授業づくりをする中で気になっていることの1つに「どうすれば、子どもたちの多様な考えを表出させることができるのか」があったため、相談をし、それについて話し合った。その結果、子どもたちに、自分と異なる意見を尊重することができる姿勢を身に付けさせることが大切であると考えた。そうすることで、子どもたちは、さまざまな意見や多様な考えを表出することができるようになると考えた。また、子どもたちが試行錯誤して得た結果について、肯定的に受け止めることが大切であると考えた。日頃から、教員と子どもたちが、多様な意見や考えを受容する支持的な学級風土をつくることが大切であると考えた。</p>

4-2 質問紙Bについて

質問紙Bの「問1」の結果を表4に示す。表4をみると「授業を実践する自信の程度」がプロジェクトを開始する前（活動①を行う前）に30%であったが、プロジェクトを終了した時（活動⑥を終了した後）に80%になっていることが分かる。このことから、プロジェクトを実践した結果、「授業を実践する自信の程度」

が高まったといえる。このことは、「授業を実践する自信の程度」の向上にプロジェクトの活動が有効に機能したことを示している。

質問紙Bの「問2」の結果を表4に示す。表4をみると、プロジェクトの終了時の記述に以下の記述がみられる。

「このプロジェクトでは、生活科の授業について実践報告、公開授業、私の相談（気になっていること）などをもとに話し合い、授業中に実施する手立てについて理解を深めることができた。」という記述がみられる。また、「表情を簡単なマークで描かせたり、メモをさせたりして、それらをもとに学級で話し合わせる」、「前時に子どもたちが書いた『振り返り』を読ませたり、その記述をもとに学級で話し合わせたりする」といった具体的な手立てが示されている。さらに、「振り返り」の活用についても示されている。この記述から「教員が実施する手立てについて理解を深めることができたこと」をうかがい知ることができる。

「話し合いの場において、子どもたちが関係付けたり、分類したりすることができるように、教員が支援することが大切であること、また、教員が話し合いに適切に介入して、子どもたちに考えさせることが大切であることなど、教員のコーディネーターとしての役割について理解を深めることができた。」という記述がみられる。この記述から「話し合いの場における教員の介入方略について理解を深めることができたこと」をうかがい知ることができる。

「子どもたちの活動に対する評価については、即時性のある評価を用いると効果的であることを理解することができた。」という記述がみられる。この記述から「評価について理解を深めることができたこと」をうかがい知ることができる。

「授業をつくる際、子どもたちの思考の流れに沿って授業を展開することの大切さ、共通の体験活動をさせることの大げさについて学ぶことができた。」「子どもたちの家庭環境に配慮して授業をつくる必要があることについても理解を深めることができた。」という記述がみられる。この記述から「授業づくりについて、子どもたちの思考の流れ、体験活動、家庭環境への配慮という視点から理解を深めることができたこと」をうかがい知ることができる。

その他、「発達段階、キャリア教育といった視点から理解を深めることができたこと」をうかがい知ることができる。

ちなみに、上記の「教員が実施する手立てについて理解を深めることができたこと」、「話し合いの場における教員の介入方略について理解を深めることができたこと」、「評価について理解を深めることができたこと」、「授業づくりについて、子どもたちの思考の流れ、体験活動、家庭環境への配慮という視点から理解を深めることができたこと」、「発達段階、キャリア教育といった視点から理解を深めることができたこと」は「授業を実践する自信の程度」が向上した要因といえる。

表4 プロジェクトを開始する前と終了した時の「授業を実践する自信の程度」と記述の内容

調査時	自信の程度	記述の内容
開始前	30%	現在、生活科の授業づくりを考える際、『小学校学習指導要領（平成29年告示）』及び『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 生活編』をもとに、単元計画をたて、授業を実践している。私は、授業において、子どもたち一人ひとりに応じた、より適切な活動を仕組むことができるようにしたい。また、子どもたちが、生活に関わる見方・考え方を生かし、気付いたことをもとに考えることができるようにしたい。さらに、子どもたちの発達段階について理解を深め、子どもたちの思考がどのように働き、具体的にどのような手立てをすれば良いのかを考えたい。特に、授業中、子どもたちが話し合う場があるが、その場における教員の支援の仕方に課題があると感じている。子どもたちが話し合う場において、気付きの質を高める支援ができるようになりたい。
終了時	80%	このプロジェクトでは、生活科の授業について実践報告、公開授業、私の相談（気になっていること）などをもとに話し合い、授業中に実施する手立てについて理解を深めることができた。具体的手立てとしては、「表情を簡単なマークで描かせたり、メモをさせたりして、それらをもとに学級で話し合わせる」、また、「前時に子どもたちが書いた『振り返り』を読ませたり、その記述をもとに学級で話し合わせたりする」といった活動を取り入れることで、子どもたちが気付いたり、その気付きを広げられたりできることが分かった。「振り返り」を活用すると、子どもたちが、自らの成長に気付くことができると考えた。

	<p>また、話合いの場において、子どもたちが関係付けたり、分類したりすることができるように、教員が支援することが大切であること、また、教員が話合いに適切に介入して、子どもたちに考えさせることが大切であることなど、教員のコーディネーターとしての役割について理解を深めることができた。</p> <p>さらに、子どもたちの活動に対する評価については、即時性のある評価を用いると効果的であることを理解することができた。</p> <p>授業をつくる際、子どもたちの思考の流れに沿って授業を展開することの大切さ、共通の体験活動をさせることの大切さについて学ぶことができた。また、子どもたちの家庭環境に配慮して授業をつくる必要があることについても理解を深めることができた。</p> <p>学級づくりという視点からいうと、日頃から、教員と子どもたちが相互に尊重し、肯定的な学級風土をつくることが大切さであるということを知ることができた。</p> <p>1年生という発達段階、また、キャリア教育の視点からも生活科について理解を深めることができた。</p> <p>上記のように、このプロジェクトを通して理解を深めることが、さまざまあり、大変勉強になった。</p>
--	---

おわりに

本研究では、2023年度の山口大学教育学部の学部・附属共同プロジェクト「授業づくり支援プロジェクト」を実践し、プロジェクトに参加した徳永の意識を明らかにし、プロジェクトの有効性について議論した。

その結果、以下の2つのことが明らかになった。

- ① 各活動に対して良好な意識をもったことが示された。さらに、各活動の話合いを通して、生活科について理解を深めたり、考えを深めたりしたようすをうかがい知ることができた。
- ② プロジェクトを実践した結果、「授業を実践する自信の程度」が高まったことが示され、「授業を実践する自信の程度」の向上にプロジェクトの活動が有効に機能したことが明らかになった。「授業を実践する自信の程度」が高まった要因として、「教員が実施する手立てについて理解を深めることができたこと」、「話合いの場における教員の介入方略について理解を深めることができたこと」、「評価について理解を深めることができたこと」、「授業づくりについて、子どもたちの思考の流れ、体験活動、家庭環境への配慮という視点から理解を深めることができたこと」、「発達段階、キャリア教育といった視点から理解を深めることができたこと」があったことをうかがい知ることができた。

今後も「授業づくり支援プロジェクト」を実践し、附属学校教員と大学教員の協働体制を持続・発展させ、プロジェクトの有効性について議論する必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました元文部科学省初等中等教育局主任視学官の嶋野道弘氏に感謝の意を表します。

付記

本稿は、山口大学教育学部附属教育実践総合センターによる「2023年度学部・附属共同プロジェクト～学校危機や困難を乗り越える学部・附属の連携・協働～」に採択された「授業づくり支援プロジェクト」の成果の一部をまとめたものである。

文献

藤上真弓・土井裕美・志賀直美・小林弘典・浦田敏明・前田昌平・岡崎智利 (2019) : 「資質・能力の育成を図る生活科・総合的な学習の時間の授業づくりに関する研究」、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、第48号、pp. 19-28.

- 藤上真弓・大塚進真・志賀直美・小林弘典・浦田敏明・前田昌平・岡崎智利（2020）：「資質・能力の育成を図る生活科・総合的な学習の時間の授業づくりに関する研究Ⅱ」、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、第50号、pp. 19-26.
- 藤上真弓・佐伯英人・徳永真衣・大塚進真・志賀直美・小林弘典・浦田敏明・前田昌平（2022a）：「生活科・総合的な学習の時間の取組の充実を図るための附属教員と大学教員の協働体制の構築」、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、第54号、pp. 45-54.
- 藤上真弓・大塚進真・佐伯英人（2022b）：「総合的な学習の時間の授業改善に向けた『授業リフレクション』」、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、第54号、pp. 263-272.
- 藤上真弓・徳永真衣・大塚進真・志賀直美・久保田大貴・浦田敏明・前田昌平・佐伯英人（2023）：「生活科・総合的な学習の時間の取組の充実を図るための附属教員と大学教員の協働体制の構築（その2）」、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、第56号、pp. 83-88.
- 文部科学省（2018a）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）』、東洋館出版社.
- 文部科学省（2018b）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 生活編』、東洋館出版社.